

The Faerie Queene 第2巻後半の神学的解釈 (1)

野 呂 俊 文

(人文学部人文学科)

A Theological Interpretation of the Second Half of *The Faerie Queene*, Book II (1)

Toshifumi NORO

序

〈節制〉(Temperance)の徳を主題とする *The Faerie Queene* 第2巻は、〈節制〉の徳を称揚しながら、同時にその徳の限界をも示す作品になっていると思われる。第2巻後半、すなわち第7篇から第12篇において、主人公ガイオン (Guyon) は、マモン (Mammon) の洞穴に下りていくことによって墮落を経験するが、アーサー (Arthur) によって救済され、アルマ (Alma) の城で教育を受け、罪が滅ぼされたあと、巡礼 (Palmer) の忠告に従いながら、最大の敵アクレイジア (Acrasia) を打ち破る。この小論では、第2巻後半を概観しながら、作品の持っている神学的意味なども考察してみたい。

I

アルマの城に攻撃を加える軍勢が放つ矢の中で最も巨大で強力なのは、〈美〉(Beauty) と 〈金〉(Money) の二つであると述べられているが (2. 11. 9), この二つの誘惑は、マモンとアクレイジアという形で、第2巻後半の最初と最後、すなわち第7篇と第12篇に配置されている。

ガイオンはマモンが谷間で古財貨を日干ししているのを見、誘われてマモンの「富の館」(House of Riches) に下りていく。さらに、フィロティミー (Philotime) の神殿とプロセルピナ (Proserpina) の園を見学した後、地上に戻るが、地上の大気を吸い込むや否や気を失ってしまう。気絶して倒れているガイオンは、パイロクリーズ (Pyrochles), サイモクリーズ (Cymochles) の兄弟によって盾と武具をはぎとられるという辱めを受けそうになるが、危ういところでアーサーによって救助される。

洞穴でのガイオンは一見優等生のように見える。彼はマモンの財宝も、フィロティミーを嫁にやろうという誘惑も、黄金の果実も、銀の椅子に坐って休むことも、すべて拒否する。マモンがこのように誘惑したのは、「騎士を罪深い餌によって、不節制におとし入れ、致命的な墮落をさせるためであった。もしもこの誘惑に彼が少しでも心を傾けていたら、後ろに控えているあの恐ろしい悪鬼がすぐさまきれぎれに引き裂いてしまうところであった」(2. 7. 64) とスペンサーは述べている。ガイオンはすべての点で用心深く、マモンの罠をよく見破り、「見事にべてん師の裏をかき、その餌食にならなかった」(2. 7. 64) のである。それにもかかわらず、彼は地上に戻った途端、「生命がその巢から飛び去り」(2. 7. 66), 意識を失い、死んだようになってしまう。一体これはど

うということであろうか。彼はマモンのすべての誘惑に勝ち、一見勝利を得たごとく見えるのにである。一応、食物と睡眠を欠いたために肉体の力が弱ってしまったのだと説明されている。しかし、われわれはスペンサーの言語表現をもっと細かく見ていく必要があると思われる。ガイオンの仮死状態は、彼が犯した過ちの結果であるとも考えられるからである。

アリストテレスは、〈節制〉を意味する *σωφροσύνη* の語源を、*σώζειν* (保つ) と *φρόνησις* (分別) との合成語と解釈していた¹。すなわち、〈節制〉とは〈分別を保ち、それに従うこと〉であって、〈節制〉の徳は〈分別〉という徳がなければ十分に機能しないことになる。スペンサーもこの考えを踏襲していて、ガイオンは〈分別〉を寓意する巡礼に導かれている限り、大きな過ちを犯すことはない。この意味で巡礼はガイオンの〈信頼できる案内人〉(trusty guide) (2. 7. 2)なのである。ところが、ガイオンがマモンに遭遇するくだりでは、彼は〈怠惰の湖〉の向こう岸に残してきた巡礼とは離れ離れになってしまっている。第7篇の冒頭で、案内人を失ったガイオンは、北極星の〈忠実な光〉(2. 7. 1)を、天をすさまじい恐怖でおおう霧や嵐の雲によってかき消されてしまった舵手(pilot)にたとえられている。一人で道を進むガイオンは、「たえず自分自身の美德と称賛に値する立派な行為で自分を慰める」(euermore himselfe with comfort feedes, / Of his owne vertues, and prayse-worthy deedes.) (2. 7. 2)のである。ここには、ガイオンの〈高慢〉(pride)と〈思いあがり〉(vainglory)を読み取ることができる。

第1巻と第2巻は〈平行構造〉(parallel structure)を持ち、多くの箇所において対応することは周知の事実であるが²、ここでガイオンは、「美德は自らの光によって、暗闇も通り抜けることができる」(1. 1. 12)と言った赤十字の騎士と同様、〈高慢〉の罪を犯していると考えられる。また、ガイオンはマモンからの富の申し出を拒否するとき、「私は必要なものはすべて持っている」(2. 7. 39)と言っている。このような〈自己依存〉(self-reliance)、〈自己充足〉(self-sufficiency)の態度は、パウロの神学では罪とみなされるものであり、〈高慢〉に他ならない。それは、生命の授与者である神から顔をそむけ、自己の力で地上的なものによって生きられるとする〈自己欺瞞〉(self-delusion)であり、パウロのいう〈肉に従って〉(according to the flesh, *κατὰσάρκα*) 生きることに他ならないからである³。

「私は必要なものはすべて持っている」と豪語するガイオンは、パウロの用語を借りれば、〈自然の人〉(the natural man) (1 Cor. 2:14)であると言することができる。〈自然の人〉とは、「神の霊に属する事柄を受け入れず」(1 Cor. 2:14)⁴、「自分の理性にのみ頼ろうとする、精神的に生れ変わっていない人」⁵のことであり、〈神の霊〉(Spirit)に導かれて生きる〈霊の人〉(he that is spiritual) (1 Cor. 2:15)とは対極に立つ。〈節制〉の徳といういわば〈この世の知恵〉(the wisdom of this world) (1 Cor. 2:6)によって、自分は大丈夫であり、マモンの誘惑に負けることはないと自信過剰に陥っているガイオンは、すでにマモンと同じ土俵に立ち、すでにマモンと同じ価値観を受け入れているのであると言することができる。彼は財宝を好きなだけやると言われたとき、「正しい手段で得られたことが分かるまでは、やると言われたものも受け取りたくはない」(2. 7. 19)と答えるが、ここではすでにガイオンの気持がマモンの差し出す富に傾いていると見なければならぬ。また、マモンの娘フィロティミー(Ambitionの寓意)を望むなら嫁にやろう言われたときに、ガイオンは、生身の人間である自分は不死身の方の連れ合いとしてふさわしくなく、またすでに自分は別の女性に愛を捧げている、と言って丁重に断わる。彼は、自分が話している相手が、神と敵対する力である〈この世の神〉(God of the world) (2. 7. 8)であり、彼を誘惑して墮落させ、破滅させようとしている悪魔であることに、無邪気と言っていい程気づいていない。

洞穴の入口は〈天の光〉(heavens light) (2. 7. 3)の差し込まない薄暗い谷間にあると述べられているが、さらに洞穴の中に入っていったガイオンには、もはや〈天の光〉は届かないのであ

る。そのうえ、彼の〈忠実な案内人〉である巡礼の導きの手もない。自分が危険な状態にあることに全く無知であるガイオンのために、作者は「永遠の神が汝をそのような破滅から救い給わんことを」(2. 7. 34)と、思わず頓呼法 (apostrophe) を発するのである。

このような状態にありながら、自信過剰になっているガイオンの〈自己充足〉の態度は〈思いあがり〉(vainglory)とも言えるが、マモンはこれを見抜いていて、ガイオンに‘Vain glorious Elfe’(2. 7. 11)と言って呼びかける。この言葉はガイオンが、自分は世俗の富に心を向けるより、武功と名誉を求めると言ったことに対して言われたもので、表面的には、「空しい栄光を求める妖精よ」という意味であり、読者はこの意味だけに解釈して、これはマモンの的外れな誹謗であるとしてかたづけがちである。しかし、もう少し大きな文脈で見ると、この‘vain glorious’という語句は〈vainglory〉という名詞の形容詞形の働きをしていると解釈でき、〈思いあがり〉に陥っているガイオンの批判として、本質を突いた言葉になっている。

このような、表面の意味と裏の意味の両方を見なければならない言葉の多義性を用いた技法は、スペンサーの言語表現の妙とも言えるものである。一見根拠のない誹謗を言っていると思われる登場人物に、時折真実を突いた批判の言葉を口にさせるのは、*The Faerie Queene* という作品の技法の一つである。たとえば、第1巻でDespairが赤十字の騎士に向かって、「お前はわが身を邪悪なデュエッサに売り渡し、その女と共に罪業で自分の身をけがした」(1. 9. 46)と言っているのも、単なる根拠のない誹謗ではなかったのであって、まさか真実を語っているとは読者が思ってもいないときに、Despairは何げなく真実を口にするのである。

表面上はマモンのすべての誘惑に打ち勝ち、自分の〈徳〉(virtue)によって絶対に罪に陥ることはないと確信しているガイオンは、自分が勝利を得ていると思いついでいるまさにそのときに、最も油断のならない〈高慢〉(pride)と〈思いあがり〉(vainglory)の罪に陥るのである。ロバート・バートンは1621年に出版されたその著*The Anatomy of Melancholy*の中で、〈自己愛〉(self-love)、〈高慢〉(pride)、〈思いあがり〉(vainglory)——これらは共に自己に対する盲目的愛(caecus amor sui)である——が、悪魔の三大罫であるとするクリソストム(Chrysostom)の考えを紹介している⁶。怒り、情欲、貪欲、恐怖、悲しみや、その他いかなる情念も我々を捕えることができない場合でも、これら自己愛、高慢、思いあがり、狡猾に、また気付かないうちに、我々を墮落させるのである⁷。さらに、バートンはクリソストムの次の言葉を引用している。

He that hath scorned all money, bribes, gifts, upright otherwise and sincere, hath inserted himself to no fond imagination, and sustained all those tyrannical concupiscences of the body, hath lost all his honour, captivated by vainglory.⁸

(すべての^{かね}金、賄賂、贈り物を却け、愚かな妄想を抱くこともなく、圧制的な肉体のすべての欲望にも屈することなく、他の点では正直で誠実な者も、思いあがり(vainglory)のとりこになって、すべての名誉を喪失した。)

地上に戻って気絶したガイオンもまた、パイロクリーズとサイモクリーズに武具を脱がされかかり、危うくそのすべての名誉を失いそうになる。仮死状態は、寓意のレベルで見れば、彼が罪を犯したことの結果であると見ることができる。パウロによれば、「罪の報酬は死である」(the wages of sin is death)(Rom. 6:23)からである。ガイオンの気絶が〈アダムの墮落〉(Fall of Adam)を象徴し、その墮落の原因は〈思いあがり〉あるいは〈高慢〉であると解釈できる。モーリス・エバンズは、ガイオンについて、

His fall is due to Pride: he has failed to realize the limitations of human strength and...he is over-confident in his own virtues and praise-worthy deeds, so that he squanders his virtue in seeking out occasions for its exercise which he would have been wiser to avoid.⁹

と述べているが、筆者も基本的にはこの解釈に従いたい。

ガイオンがアルマの城で恥じらう乙女 Shamefastness に会ったとき、アルマは彼に、「あの娘はあなたの〈慎み深さ〉(modestee)の泉なのです。あなたは〈慎ましやかな〉(shamefast)方ですが、あの娘は〈恥じらい〉(shamefastness)そのものなのです」(2. 9. 43)と言う。これを聞くとガイオンは、「ひそかに赤面し、顔をそむけるが、姫は上手にとりつくろって、見なかった振りをする」(2. 9. 44)と述べられている。ここでガイオンが赤面するのは、単にその乙女が彼の〈慎み深さ〉の泉であると指摘されたからではない。〈節制〉の騎士であるガイオンは、当然〈慎み深さ〉(modesty)を持っていなければならなかったにもかかわらず¹⁰、自分が〈慎み深さ〉を忘れ、それとは正反対の〈思いあがり〉(vainglory)のとりこになり、〈高慢〉の罪に陥るという過ちを犯したことに気づいた彼の自覚が、ここに明確に表わされていると見なければならぬ。

さて、第3篇でブラガドキオ(Braggadocchio)は、ガイオンの馬を見つけて、これを盗んでいた。Braggadocchioという名前は、〈自慢する〉という意味の英語bragにイタリア語の語尾を付けた造語であって、ブラガドキオは〈思いあがり〉(vainglory)の寓意と考えられる。馬は人の〈意志〉(will)の寓意であり、ブラガドキオによって馬の手綱を握られたガイオンの意志は、〈思いあがり〉によって支配されていたことになる。ガイオンと直接会えることはなく、彼とは一見無関係に見えるブラガドキオの挿話も、寓意のレベルでは、このようにガイオンが〈思いあがり〉に取りつかれたことを示す伏線となっているのである。

トマス・アキナスは、〈思いあがり〉(vainglory)が人を〈自信過剰〉(self-confident)にさせる危険な罪であると述べている。

Vainglory is stated to be a dangerous sin, not only on account of its gravity, but also because it is a disposition to grave sins, in so far as it renders man presumptuous and too self-confident: and so it gradually disposes a man to lose his inward goods.¹¹

ガイオンも〈思いあがり〉に取りつかれた結果、自信過剰になり、本道からそれ、結局、気絶することになってしまうのである。マモンの洞穴に下っていったことが、ガイオンにとって正道からの逸脱(aberration)であることは、先に見たように、そこが〈天の光〉の届かない悪魔の領域であるという点や、ガイオンがアーサーに救われ、気絶から目覚めたときに、巡礼を見て、'Dear sir, whom wandring to and fro / I long haue lackt' (2. 8. 53)と呼びかける言葉などに示されている。この'wandring'という語はただ単に〈さ迷う〉を意味するだけではなく、〈本来の目的からそれる〉(OED wander 3b = turn aside from a purpose)、〈過ちを犯す〉(OED 3b = fall into error)という意味でもあって、ここには、本来の使命から逸脱するという過ちを犯していたというガイオンの自覚が示されている。

ガイオンがマモンの誘いに乗って、地下に下るに至ったのは、彼が〈思いあがり〉にとりつかれていたからであったが、直接のきっかけは〈好奇心〉(curiosity)であったと考えられる。アダムの墮落の原因の一つは彼の〈好奇心〉であったし、パンドラが箱を開け、その結果この世があらゆる種類の不幸や病で満たされることになったとされるのも、〈好奇心〉が原因であった。〈好奇心〉は、われわれが知っても仕方のないものを、ただ知りたいといううずきから、知ろうとする方向へ

とわれわれを駆り立てる欲求であり、アウグスチヌスは〈好奇心という病〉(this disease of curiosity)と呼んでいる¹²。

〈好奇心〉は新約聖書のヨハネ第一の手紙では、〈目の欲〉(lust of the eyes)と呼ばれている。それは〈肉の欲〉(lust of the flesh)や〈高慢〉(pride of life)と並んで〈この世〉(the world)に属するものであって、神から出たものではないとされる¹³。〈この世の神〉(God of the world)(2. 7. 8)であるマモンは、ガイオンの〈高慢〉につけこみ、彼の〈目の欲〉(=好奇心)に訴えることによって、彼を洞穴の中に誘い込み、栄達(Philotime)、食欲(fruit of gold)、休息(siluer stoole)など〈肉の欲〉に対する誘惑によって、彼を墮落へ導き、破滅させようとするのである。

アウグスチヌスは、人がつまらない自慢話をするとき、われわれは最初お義理で聞いてやっているつもりでいても、徐々に話に引き込まれてしまう、と述べているが¹⁴、これと同じように、ガイオンも最初はマモンの富を軽蔑しているが、好奇心を刺激されて、ついには財宝の隠し場所を見せてもらうために洞穴の中に入っていくことになる。アダムの知識欲を〈貪欲〉(avarice)と解釈することは一般的であったようであるが¹⁵、マモンの〈貪欲〉とガイオンの〈好奇心〉について、スペンサーは同一の表現を用いることによって、両者の共通点を明らかにする。アキナスによれば、〈好奇心〉と〈貪欲〉は共に〈目の欲〉の二つの側面であった¹⁶。

マモンは、洞穴の前で、「莫大な財宝で目と飽くなき欲望とを楽しませている」(feede his eye / And couetous desire with his huge threasury)(2. 7. 4)と叙述されている。一方、洞穴の中を案内されるガイオンは、「道すがら驚きで目を楽しませる」(with wonder all the way / Did feed his eyes)と叙述されている。これら両方には、〈目を楽しませる〉(feed his eye/eyes)という表現が共通して用いられていて、ガイオンも、マモンと同様、〈目の欲〉(lust of the eyes)のとりこになっていることが暗示されている。マモンはガイオンに向かって、「もしお前の〈貪欲な目〉(greedy vew)が満足しないなら」(2. 7. 9)という言い方をしているが、これによって、マモンもガイオンも共に〈目の欲〉に関して貪欲であることを、作者は示しているのである¹⁷。マモンの「目はかすんでいた」(eyes were bleard)(2. 7. 3)と述べられているが、「天の美しいランプの忠実な光をかき消された(yblent)」(2. 7. 1)ガイオンの目も、道徳的な意味でかすんでいたと考えられる。ここで用いられている'yblent'という語は、〈盲目にする〉を意味する'blind'の別形'blend'の過去分詞で、〈判断力・道徳を盲目にする〉(OED 2 = blind the understanding, judgement, or moral sense)の意味をも持つ。

II

こうして、ガイオンは天に目を向けるかわりに、自己に目を向け、自分の徳を過信して墮落したと考えられる。彼の〈自己依存〉(self-reliance)の態度は、すでに見たように、〈自然の人〉のそれであって、これは反キリスト教的な態度、異教的な態度と言える。意識を失って無防備に横たわるガイオンを支配するのは、彼のこの異教的態度であって、そのことは、彼が異教徒の兄弟パイロクリーズとサイモクリーズのなすがままの状態に置かれることによって、寓意的に示されている。

パイロクリーズ(Pyrochles)(πύρ 火 + ὀχλέω 乱す)とサイモクリーズ(Cymochles)(κύμα 波 + ὀχλέω 乱す)は、それぞれ、「怒情的欲求能力」(irascible appetite)から生じる〈乱れ〉(perturbation)と、「欲情的欲求能力」(concupiscible appetite)から生じる乱れを寓意する人物であるが、第8篇における彼らの役割は単にそれにとどまらない。第8篇においては、冒頭のArgumentで、この二人が〈異教徒の兄弟〉(Paynim brethren)と呼ばれていることからもうかがわれるように、彼らはガイオンの心に巣くう〈異教的要素〉を寓意すると考えられる。

異教徒あるいは回教徒を表わす語は *paynim*, *pagan*, *Sarazin* などである。第2巻全体で、*paynim* は8回使用されていて、そのうち7回まではこの第8篇に見られ、残りの1回は第9篇の第2スタンプで用いられている。*pagan* は全体で5回使用されていて、そのうち4回が第8篇、1回だけ第10篇に表われる。*Sarazin* について見れば、全体で3回使用されているが、そのすべてが第8篇においてである。第5篇でもこの兄弟は主要な登場人物であるが、そこにおいては、異教徒を意味するこれらの語が一度も用いられていないのは注目すべきことであって、この第8篇では彼らの役割がこれまでとは異なっていることが分かる。

ガイオンを神から引き離している異教的要素の寓意である異教徒兄弟がアーサーによって滅ぼされたとき、初めて生命がガイオンに戻り、彼は失神から覚めるのである。スペンサーは、'Life hauing maistered her sencelesse foe' (2. 8. 53) と述べているが、この一行はガイオンの生命が失神に打ち勝ったことを意味すると同時に、アーサーの表わす〈神の生命〉(life) が、パイロクリーズ、サイモクリーズの寓意する異教徒的要素という「善悪の感覚を失わせる敵」(sencelesse foe) に打ち勝ったことをも意味している。倒れているガイオンを見て、「不実な裏切りによって有名になった」(2. 8. 12) と誹謗するパイロクリーズも、「こうして野原に死んで転っている男は悪人だと思う」(2. 8. 14) と言うサイモクリーズも、共に明らかに「正しい判断力を失っている」(senseless OED 4 = devoid of intelligence) のである。また、巡礼が言うように、「死者の衣服をはぎ取るのは冒瀆で、どんな罪よりも重い」(2. 8. 16) と考えられていたにもかかわらず、ガイオンからその武具をはぎ取ろうとする彼らは、実際、「情を欠いた」(senseless OED 2 = destitute of mental sensibility, incapable of feeling) 敵であると言える。

第8篇において、パイロクリーズ、サイモクリーズの二人は復讐心のかたまりとも言え、ここでは *revenge* や *vengeance* という語が繰り返し用いられている。彼らの復讐心は、アーキメイゴ (Archimago) が彼らを唆し、アティン (Atin, 争いの寓意) が二人の心に「熱い復讐の火を燃えたたせた」(2. 8. 11) 結果であるが、それがガイオンに向けられるのは明らかにお門違いである。これはラディメイン (Ruddymane) を前にして復讐の誓いを立てた (2. 1. 61) ガイオンのパロディーとも考えられ、ここには復讐の誓いを立てたときの彼の判断が、あるいは誤りであったかもしれないことが暗示されている。

巡礼は異教徒兄弟の復讐心を〈恥ずべき〉(vile) と形容している ('Vile is the vengeance on the ashes cold' 2. 8. 13; 'vile reuenge' 2. 8. 16)。これは二人の復讐についてだけでなく、個人的復讐全般についてあてはまる。たとえば、復讐心のとりことなったフィードン (Phedon) は、恋人クラリベル (Claribell) を殺し、自分を裏切った友人フィリーモン (Philemon) を毒殺し、さらにはプライイーニ (Pryene) をまで殺そうと追いかけ、ついには理性を失って〈狂気〉(Furor) にとりつかれてしまう。

個人的復讐は、「復讐はわたしがすることであり、わたしが報復する」(Vengeance belongeth unto me, I will recompense) (Heb. 10:30) と語った神の言葉と矛盾するものである。パウロは、「自分で復讐せず、神の怒りに任せよ」(Rom. 12:19) と言い、「人を裁く者はだれであろうと、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めているのである」(Thou art inexcusable, O man, who-soever thou art that judgest: for wherein thou judgest another, thou condemnest thyself.) (Rom. 2:1) と述べている。

先に、ガイオンの慈悲を得て赦されたパイロクリーズは、ガイオンにフューロー (Furor) とオケイジョン (Occasion) を釈放してくれるように頼み、その結果フューローによって苦しめられる破目になる。パイロクリーズはガイオンに助けを求めるが、巡礼はガイオンに過度の〈慈悲〉や〈哀れみ〉を抑えるよう諭す (Dear sonne, thy causelesse ruth repress, / Ne let thy stout hart melt in

pitty vaine.) (2. 5. 24). ここでは、パイロクリーズ同様、ガイオンも誰を赦すべきかが分かっていないことが示されている。また、赤十字の騎士を誤って罰しようとしたときにも、ガイオンは誰を罰すべきかが分かっていなかった。〈慈悲〉も〈復讐〉も、共に本来神に属すべきものであって、人は裁くことができないことを、これらの挿話は暗示している。

ガイオンに必要なのは、復讐の誓いを立てることではなく、むしろ自分自身の罪深さを自覚することであり¹⁸、ラディメインの〈手の血〉(=原罪)が示す fallen nature が自分自身の中にもあることを理解し、独善的な〈自己依存〉(self-reliance)を放棄し、〈神の恩寵〉(grace)を受け入れることなのである。アーサーは、負かした相手パイロクリーズに対して、「悪事もすべての復讐も水に流して」(casting wrongs and all reuenge behind) (2. 8. 51), 命を助けてやろうと言うが、第8篇のこの箇所を最後として、このあと第2巻からは revenge という語も、vengeance という語も姿を消す¹⁹。

パイロクリーズは、アーサーから、「もし間違った信仰を捨て、一生私の忠実な臣下になるなら、お前の武勇に免じて生命を許してやる」(if thou wilt renounce thy miscreaunce, / And my true liegeman yield thy selfe for ay, / Life will I grant thee for thy valiaunce) (2. 8. 51) と言われるが、これを拒否し、生命を失う。一方、自分がアーサーに救われたことを知ったガイオンは、命を助けられたことを感謝し、次のように言う。

My Lord, my liege, by whose most gracious ayd
I liue this day, and see my foes subdewd,
What may suffice, to be for meede repayd
Of so great graces, as ye haue me shewd,
But, to be euer bound

(2. 8. 55)

ここで用いられている 'My Lord' という呼びかけは、表面的には〈封建君主〉を意味し、「わが君」という意味であるが、同時に、大文字で書かれていることが暗示するように、「わが主よ」という意味でもあって、ここでガイオンはこれまでの独善的な自己依存の態度を捨て、キリストに対して全面的な〈従順〉(obedience)を示していると解釈できる。また、〈神の恩寵〉(grace)を拒否した (he so wilfully refused grace) (2. 8. 52) パイロクリーズとは反対に、ガイオンは〈神の恩寵〉(most gracious ayd; so great graces) (2. 8. 55)を受け入れることによって生れ変わるの

である。第8篇においてアーサーが寓意のレベルではキリストを表すことは、彼がパイロクリーズに対して言う「犯した悪行はすべて忘れてやろう」(I...all thy wrongs will wipe out of souenaunce) (2. 8. 51) という言葉が、「わたしは、彼らの不正を大目に見、もはや彼らの罪を思い出しはしない」(Heb. 8:12) と語る神の言葉を想起させることにも示されている。また、アーサーのことを、サイモクリーズは 'dayes-man' (2. 8. 28) と呼び、パイロクリーズは 'partaker of his crime' (2. 8. 30) と呼んでいる。〈daysman〉は〈mediator〉の意味で、〈神と人との間の仲介者〉(1 Tim. 5)であるキリストを指し、また、「彼の罪を共に担う者」も、やはり、「この悪の世から我々を救い出そうとして、ご自身を我々の罪のためにささげてください」(Gal. 1:4)キリストを指す。アーサーは、パイロクリーズとの戦いにおいて、右の脇腹に傷を受けるが(2. 8. 38)、これは十字架にかけられたキリストを暗示する。また、アーサーの傷口からは血がほとばしり出るが、これは、「血を流すことなしには罪のゆるしはありえない」(Heb. 9:22) からであり、神が十字架上

のキリストの血によってすべてのものをご自分と和解させた (Col. 1:20) ことの寓意であると解釈できる。苦境に陥ったとき、アーサーは巡礼からガイオンの剣を手渡され、それで戦うが、これは彼がガイオン (=人類) の身代りとして戦うことを意味している。

〈贖い主〉(Redeemer) キリストとも言うべきアーサーによって、パイロクリーズとサイモクリーズの寓意する〈自己の内なる異教的要素〉という罪の奴隷 (sinfull vellenage) (2. 11. 1) から贖われ、解放されたガイオンは、アーサーに対して 'the Patrone of his life' (2. 8. 55) に対すごとく、敬愛の念をこめて頭を下げる。〈patrone〉という語は、〈恩人〉という意味の他に、〈解放奴隷の主人〉(OED 2 = one who had manumitted his slave, and who retained legal claims, of a paternal nature, upon him as freedman) という意味を持つ。ガイオンがこのときまで、神から顔をそむけさせる〈自己依存〉、すなわち〈高慢〉という罪の奴隷であったことを考えれば、この場合、〈patrone〉はまさに適切な表現であると言える。また、ガイオンは、アーサーに従順を誓ったこのときから、パイロクリーズの寓意する〈怒り〉の究極の形ともいうべき〈復讐〉²⁰からも解放されるのである。

さて、ガイオンが仮死状態に陥り、アーサーに助けられるという第7篇から第8篇にかけての挿話は、ガイオンの擁護する〈節制〉の徳、あるいは一般に徳というものが、それだけでは不十分であって、第1巻で確立された〈信仰〉(faith)に基づき、かつ〈神の恩寵〉(grace)によって支えられなければならないことを示唆している。スペンサーは第8篇冒頭のスタンザで次のように述べている。

And is there care in heauen? and is there loue
In heauenly spirits to these creatures bace,
That may compassion of their euils moue?
There is: else much more wretched were the cace
Of men, then beasts. But O th'exceeding grace
Of highest God, that loues his creatures so,
And all his workes with mercy doth embrace,
That blessed Angels, he sends to and fro,
To serue to wicked man, to serue his wicked foe.

(2. 8. 1)

この引用文の9行目で、'wicked' という形容詞が二度用いられているが、その意味するところは互に異っている。'wicked man' (悪人) は、〈罪びと〉²¹を意味し、〈尊大な心を持った不信仰者〉²²のことであって、ここでは、〈思いあがり〉によって墮落し、一種の死を経験することになったガイオンのことを指している。後の 'wicked foe' の方は、「人間を罪へと誘惑し、それによって神に敵対させようとする悪の力」²³、すなわちパウロが〈罪〉と呼んで擬人化しているものを指す。それは〈罪の父〉と呼ばれるサタンおよびその勢力のことであって、奸計、罠、虚言などによって人間を墮落に導こうとする〈神と人類の敵〉のことであり、第2スタンザでは〈悪魔〉(foule feends) (2. 8. 2) と呼ばれている。

また、9行目では 'serve' という動詞が二度用いられているが、その意味が問題となる。邦訳では、9行目は、「悪人にも、神の邪な敵にも、仕えさせ給う」²⁴となっていて、二個の 'serve' を同じ意味に取っている。しかし前半では、'serue to wicked man' というふうに 'to' という前置詞が用いられていて、'serue' は自動詞であるが、後半の 'serue his wicked foe' の方の 'serue' は、他

動詞として用いられている点に注意する必要がある。これは修辞学のいわゆる〈antistasis〉(=repetition of a word in a different or contrary sense)²⁵であって、同じ語でありながら、一方を自動詞、他方を他動詞とすることによって、スペンサーはこれらに正反対の意味を持たせていると筆者は考える。自動詞の方は〈仕える〉という意味でよいが、他動詞の方は、〈serve a person right〉(OED 47. b = treat an offender as he deserves) というフレーズにおけるのと同じで、ここでは〈報いる〉という意味でなければならない。したがって、9行目は、「罪びとに仕えさせ給い、敵(罪びとと神との共通の敵)に報いる」と言っているのである。また、この場合の〈敵〉は、天使が巡礼に、「最後まで彼(=ガイオン)に対する配慮を捨てたり、忘れたりせず、いつも彼を助け、彼と私との敵(=his foe and mine)から守ります」(2. 8. 8)と言うときの〈敵〉と同じものを指している。

「被造物を愛し、造り給うたものすべてを慈悲で包み給う至高の神の恩寵」(2. 8. 1)は、ただ単に天使を遣わすだけではなく、その究極の現れとして、神の独り子キリストを派遣する²⁶。第8篇において、以上見てきたように、キリストはアーサーの姿を取って現れるのである。

注

テキストは A. C. Hamilton (ed.), Edmund Spenser: *The Faerie Queene* (Longman, 1977) を使用した。

1. Aristotle, *Nicomachean Ethics*, with an English translation by H. Rackham (Loeb Classical Library, Heinemann, 1982), pp. 338-339.
2. 第1巻と第2巻の parallel structure については、A. C. Hamilton, 'A Theological Reading of the *Faerie Queene* II,' *ELH* Vol. 25 (1958), pp. 155-162に詳しい。
3. Cf. Rudolf Bultmann, *Theology of the New Testament*, translated by Kendrick Grobel (Scribners, 1951, 1955), Vol. I, p. 239.
4. 'But the natural man receiveth not the things of the Spirit of God.' (1 Cor. 2 : 14)
5. Cf. 〈the natural man〉 = 'The unrenewed person; one that hath nothing but a principle of reason, though he be one of the most exquisite natural accomplishments, and has improved his reason to the highest pitch.' — *Cruden's Pocket Dictionary of Bible Terms* (Baker Book House, 1976), p. 192.
6. Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy* (Dent, 1977), Part I, p. 292.
7. Robert Burton, *op. cit.*, p. 292.
8. Robert Burton, *op. cit.*, p. 292.
9. Maurice Evans, 'The Fall of Guyon', *Critical Essays on Spenser from ELH* (The Johns Hopkins Press, 1970), pp. 181-182.
10. Cf. St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica* in 5 Volumes (Christian Classics, 1981), Vol. III, p. 1840: '[T]emperance is more concerned with strong passions, and modesty about weaker passions [T]emperance moderates those matters where restraint is more difficult, while modesty moderates those that present less difficulty.'
11. St. Thomas Aquinas, *op. cit.* (Christian Classics), Vol. III, p. 1735.
12. *St. Augustine's Confessions II*, with an English translation by W. Watts (Loeb Classical Library, Heinemann, 1979), p. 177.
13. Cf. 1 John 2 : 15-17: 'Love not the world, neither the things that are in the world. If any man love the world, the love of the Father is not in him. For all that is in the world, the lust of the flesh, and the lust of the eyes, and the pride of life, is not of the Father, but is of the world. And the world passes away, and the lust thereof: but he that doeth the will of God abideth for ever.'
14. *St. Augustine's Confessions II*, pp. 179-180: 'How often when people tell vain stories do we at first bear with them, as it were, for fear of giving offence to the weak; and yet by degrees, by and by we willingly give ear to them?'

15. Patrick Cullen, 'Guyon Microchristus: The Cave of Mammon Re-examined', *ELH* Vol. 37, No. 2, 1970, p. 161.
16. St. Thomas Aquinas, *op. cit.* (Christian Classics), Vol. II, p. 938: 'this spiritual concupiscence is called *concupiscence of the eyes*, whether this be taken as referring to the sight itself, of which the eyes are the organ, so as to denote curiosity, according to Augustine's exposition (*Conf. X*); or to the concupiscence of things which are proposed outwardly to the eyes, so as to denote covetousness, according to the explanation of others. (italic in the original)
- また, John A. Hardon (ed.), *Pocket Catholic Dictionary* (Image Books, 1985), p. 86は <concupiscence of the eyes> を次のように説明している。
- 'Unwholesome curiosity and inordinate love of this world's goods. The first consists in an unreasonable desire to see, hear, and know what is harmful to one's virtue, inconsistent with one's life, or detrimental to higher duties. As an inordinate love of money, it is the desire to acquire material possessions irrespective of the means employed, or merely to satisfy one's ambitions, or to nurture one's pride.'
17. オウィディウス (Ovidius) が *Metamorphoses* Book I, ll. 89-150で, 人々が金貨の時代から, 銀の時代, 青銅の時代, 鉄の時代へと墮落していった様子を叙述しているように, ガイオンも第7篇の第16-17スタンザで, 人々が古代の黄金の時代から, 時代が下がるにつれて段々墮落していった様子を述べている。ガイオンは, 人々が <高慢> のため, 自然の恵みを <欲望> (lust) を満足させるために悪用し, 節度を忘れ, さらに, 地下に埋蔵された金銀に気づくと, 今度はそれで巨大な欲望と高慢の種を作り出し, <貪欲> (avarice) が人の生命を食い尽くす欲の炎 (greedy flames) に火をつけたのだと説明している (2. 7. 16-17)。<貪欲> を富についてだけでなく, <好奇心> を含む <目の欲> (lust of the eyes) についても言っていると見れば, <高慢> が原因で人類が <墮落> し, <貪欲> になったというこの説明は, 第7篇におけるガイオン自身の墮落にも不思議に当てはまるのである。
18. 第8篇第1スタンザの 'wicked man' は, ガイオン自身のことを指していると考えられる。
19. ただし, *avenge* という語は, 2. 9. 9; 2. 10. 35; 2. 11. 25に見られる。
20. Cf. St. Thomas Aquinas, *op. cit.* (Christian Classics), Vol. II, p. 779: 'Augustine says that anger craves for revenge.' / p. 780: 'anger is a desire for vengeance.'
21. イエスの考えによると, 「人はみな罪びとであり, だれも自分は敬虔な義人であるとはいえない」のである (『聖書思想事典』三省堂, 1984, p. 16)。
- また, パウロの「ティトスへの手紙」の中の次の言葉が, この第1スタンザの注釈になると思われる。
- 「わたしたち自身もかつては, 無分別で, 不従順で, 道に迷い, 種々の情欲と快楽のとりことなり, 悪意とねたみを抱いて暮らし, 憎しみに満ち, 憎み合っていたのです (回心前の生活への言及)。しかし, わたしたちの救い主である神の慈しみと, 人間に対する愛 [love] とが現われたときに, 神は, わたしたちが正しさに基づいて行った業によってではなく, そのあわれみ [mercy] によって, わたしたちを救ってくださいました。」(Tit. 3:3-5) (『新約聖書共同訳・全注』講談社, 1981, p. 700)
- とりわけ, 「無分別で, 不従順で, 道に迷い」という箇所は, <分別> の寓意である巡礼と離ればなれになり, 神に対する従順さを失って <自己充足> の態度に陥り, さ迷っていたガイオンによく当てはまる。また, ガイオンが救われるのは, <神の愛> (love) と <あわれみ> (mercy) に基づく <恩寵> (grace) によってであって, 彼自身の徳や, 彼の「行った業」によってではない。
22. 『聖書思想事典』 p. 15.
23. 『聖書思想事典』 p. 376.
24. 熊本大学スパンサー研究会訳『妖精の女王』(文理書院, 1969) p. 249. また, 外出定男訳『仙女王』(成美堂, 1990) p. 240でもほぼ同じで, 「悪い人にも, また邪な敵にも, つくさせ給う」という訳になっている。
25. Richard A. Lanham, *A Handlist of Rhetorical Terms* (University of California Press, 1969) p. 124.
26. 『聖書思想事典』 p. 800: 「イエスの来臨は, 神の慈愛のゆきつく極限を表わしている。つまり, 自分の子を与えるほどの愛である (Rom. 8:32).」

(平成4年9月28日受理)

(平成4年12月28日発行)